二、戦争と平和

(イ) 大化の改新と聖徳太子

蘇我氏は、当時としては進歩的な氏族であったが、古代国家の危機に当り、これを乗り切れるだけの思想は勿論、政策を持っていなかった。

蘇我氏は所縁(ゆかり)のある推古天皇が即位され、厩戸皇子、即ち聖徳太子がその摂政となったが、蘇我氏の勢力下においては旧来の王権を維持するのが関の山だった。それ故、衰微した王権を戴く地方の豪族達の連合の上に立つ支配層は、従って閥族政治の慣習によらざるを得なかった。つまり、国家としての法や組織の重要性を知らなかったために、勢い蘇我氏の単独政治となり、地方豪族の連合組織の体制が崩壊すれば、それは危機と混乱を招くだけで、新しい政治体制や思想の生れる筈はなかった。

聖徳太子は王権を護り、秩序の回復を計らんとしたが、蘇我氏の権力によって阻

まれた。蘇我氏との関係は表面上は妥協して共同政治の形をとった。

太子の政治理想は仏教の興隆によって蘇我氏の主導権を奪うことであった。かくして天皇の詔により法隆寺、四天王寺等、寺院の造営という政策によって皇室が仏教興隆の先達となった。

十七条憲法の最初に「和」を説き、天皇の下に豪族達の協力体制を理想と考え、当時の支配層における内部的醜き闘争を戒めている。

大化の改新は、一面において畿内の勢力が地方に対してその法的支配権を確立したものと云えよう。

(ロ) 壬申の乱

大化の改新は着々政治の上で、実施されたが、また、その困難が直に生じた。改新の直後、蘇我氏と共に失脚した中大兄皇子は、旧豪族とむすんで謀叛をはかって鎮圧され、六四九年（大化五年）には改新政治の有力な人物であった蘇我倉山田石川麻呂が謀叛の疑いによって一族と共に滅ぼされた。この頃から革新陣営に弱体化

の兆(きざし)が生じ、天皇と皇太子の対立も深刻化した。つぎの斉明天皇の時代には、外交内政の両面で、革新政治の後退と動揺が明瞭になった。

皇太子は懸案だった任那(みまな)の回復を断念し、新羅と協調せんと欲したが、だんだん唐の半島政策が積極化し、新羅とむすんで百済を攻撃するに及んで、百済から救援の申入れを受け、九州へ出兵するの已むなきに至った。

かかる状況の下で新政府の威容を誇示する必要上、阿倍比羅夫を将として東北・北海道の辺地にまでも侵攻させ、捕虜の蝦夷を唐の天子に献上したりした。かかる対外関係により、新政が困難になったばかりでなく、天皇が大いに土木工事をおこして、宮殿の造営や、香具山の西より石上山まで長い溝渠を掘ったとき、これを「狂心の渠」とそしる者もあった。

天智天皇は、その執政の翌年、六六三年に、半島において決定的な敗北をこうむった。

唐と新羅の攻撃および内部の分裂によって滅亡しようとしていた百済は、援兵を日本と高句麗に求めたが、日本は二万七千の兵をつかわし、使を高句麗に派して共

同作戦をとらんとしたが、わが援軍は海路から進み、白村江（錦江河口）の海戦で、唐軍のために徹底的な打撃を蒙り、わが艦船四百余艘は全部焼きすてられたという。

総じて革新政治の強化には、半島における損失の補充が第一だった。天皇は藤原（中臣）鎌足に命じて近江令を制定させ、六七〇年（庚午九年）には、公民・都民・奴婢の戸籍を畿内・東海・山陽・南海・西海の広汎な地域にわたって作製した。これが後世に有名な庚午年籍（こうごねんじゃく）である。

しかし、改新後、政界の混沌たる空気は、天皇の歿後、間もなく起った内乱で一掃された。皇位継承問題で天智天皇・大友皇子と、皇太弟大海人（おおあま）皇子との間には夙（つと）に対立があったが、大海人皇子は難を吉野にさけ、天皇の歿後、近江京の大友皇子が吉野方を圧迫したため、大海人皇子は、六七二年に兵を挙げた。その結果、壬申（じんしん）の乱という大きな内乱が起った。大海人皇子は吉野を出て、伊賀・伊勢を通過、途中で地方の豪族より軍兵を徴発し、高市皇子を美濃方面の総帥とし、さらに、人をつかわして東海・東山の軍兵を集めて、速やかに不破・鈴鹿の両関をおさえた。

近江勢は東国・大和・筑紫・吉備に使を以て、兵をおこさせたが成功しなかった。

ことに大和にあった大伴・漢直一族が吉野方に加担したため、吉野勢の優勢が決定的なものとなった。これに反し、近江勢は各所で大敗し、ついに大津京は荒廃し、大友皇子は自殺、近江軍の重臣は捕らえられて斬首、もしくは流罪となった。

宮廷内部の私闘の結果、勝利者となった大海人皇子（天武天皇となられる）は、諸氏族に対して絶大な権力を獲得し、専制君主として革新政治を実現することが出来た。これが大化改新以後の歴史に新しい段階となり、また、朝鮮半島よりの撤退が国際関係を安定させる結果となったことは事実である。

天武天皇の治世十四年間に、一人の大臣も任命することなく、天皇および王族の独裁であった。皇室の権威を高めるための帝紀の編纂が天皇によって企てられるとともに、天皇の尊厳を示すために朝廷における各種の礼典がととのえられた。天皇は、権力とともに文化をも宮廷内に集中しようと努力された。

天皇の第三皇子大津皇子は「詩賦の興、大津より始まれり」とまで云われた。宮廷にはいまや、内外の文化が集り、雅会・宴遊・巡幸などの華やかな宮廷行事が内乱後の安定を物語っていた。きびしい条件の下で権力闘争に明け暮れた従来の諸王

が経験しなかった時代が到来して、『万葉集』の最盛期、天平時代における宮廷貴族の頽廃がその影を未だおとさざる良き時代がはじまろうとしていた。とは言え、宮廷内にも深い不安がない訳ではなかった。

六八六年には大津皇子の謀叛が露見し、その与党三十余名が逮捕され、皇子は自尽した。

戦争と平和は、要するに動と静である。人類の歴史は、この動と静から成立している。欲望が度を越すと争いになり、これを調整するために和を必要とする。例の大化の改新は闘争を抑えて、これを静め、和を以て連合を促した。

近代における世界の動乱は国際連盟によって果して救済されたであろうか。

こうした戦乱も、その責任をハレー彗星に帰して良いものだろうか。天変地異も亦同様である。

土地の開発に名を借りて山林の伐採が地滑りの原因となり、雪なだれを起し、あるいは洪水の原因ともなっている。これをもハレー彗星のせいだと言うのか。

近代科学の驚くべき進歩は地上において高速の列車を走らせ、海上の快速艇、水

中の潜航艇を造り、空には飛行機、月世界への探険や旅行を試みるロケットまでも発射している。この空の征服は、相手国を撃滅せんとする原爆攻撃のためである。国防のためと称する軍備は、実は「衣の下からのぞく鎧」の如きものだ。

核兵器を所有せざる国は常に戦争の脅威にさらされている。これはハレー彗星のせいだろうか。

七十六年振りに地球上から見ることの出来るこの珍客に対して、びくびくもので迎えるのか。空の神秘を人類に披露してくれる天の使として歓迎するのか。

有史以来、この珍客に対して種々と天文学者の解説がなされてきたが、私は一介の市民としてこの彗星にまつわる種々の話を、この御客様の真意に背くかも知れぬが、憶測をめぐらし、人間の歴史の中から自分なりに興味を持ったお話を若干述べて見たいと思う。

これは飽くまでも推測の程度で、占星術者の言い草のように、「当るも八卦、当らぬも八卦」と思ってお読み頂ければ幸甚です。

(八) テロから戦争へ

昭和六十一年五月五日、サンケイ抄

エア・ランカ航空機の時限爆弾は、まるで国際テロを討議する東京サミットの開幕に合わせてセットされていたようにみえる。そう、恐らく、舞台の耳目を強引にひきつけようとするたくらみだったのだろう。

日本の平和で新緑の黄金週間なんぞとは関係なく、紛争の火ダネは地球のいたるところに顔を出している。宗教の対立、文化の差異、民族の憎悪……とテロの背景はさまざまだが、これはすでに「戦争」だと認識しておくほうがいい。

こんどの旅客機爆破には、スリランカからの独立運動を展開している少数民族タミル人学生グループが犯行声明をだした。青いインド洋の白いサンゴ礁の島モルジプは、若い人たちの人気を集める観光コースで知られる。しかしここもまた、ただの「南海の楽園」ではなかった。

これまで日本人がテロに巻きこまれて死亡するケースは少なかったのだが、同機に乗りあわせた八人はいずれも新婚旅行客だという。亡くなった二人の身元確認の

決め手になったのは、愛を誓って交わしたばかりの指輪だったというのが痛ましい。

国際テロ組織の標的になっているアメリカ国務省は、さきごろ同国民に海外旅行の「心得」をだして注意していた。一つ、中東やリビア、ウガンダなど紛争地域を避けろ。二つ、派手な振舞いやアメリカ人とわかる服装をするな。三つ、空港へは早めに行け。

日本人もそのくらいの心得は必要だろうが、こんどのような無差別テロには効き目は少ない。こわいのはテロのみならず、たまたまソ連チェルノブイリ原発の周辺を旅行していた日本人四人が、微量ながら被ばくした、トラベルはやはりトラブルである。